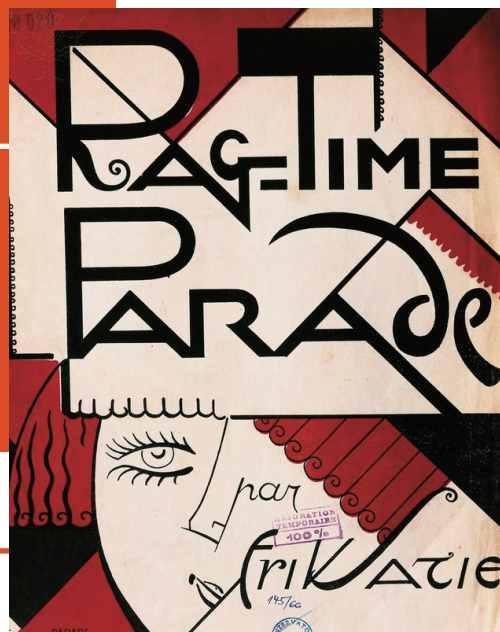


Parade

100年前の 衝撃を再び

2017年度国立音楽大学音楽情報専修、
音楽学コース専門ゼミⅠ・Ⅱ研究発表会



出典：Britannica_Image_Quest_126_497968.jpg

【序章】

パリのシャトレザ座はざわめきと動揺に包まれていた。観客は舞台に押し寄せ、「幕を下ろせ」と叫んだ。それと同時に、舞台には馬が登場しサーカス芸を始めた。無音の会場で、ひざまづいたり、踊ったり、お辞儀をする馬を見て、観客はダンサーたちが自分たちの抗議をからかっているのだと思い込み、頭に血を上らせて口々に叫んだ。「死ね、ロシア人!」「ロシア人はドイツ人(当時の敵国)だ!」

～シェング・スヘイエン『ディアギレフ』みすず書房 2012
請求記号●J122-065 より～

これは今から100年前の1917年5月18日、一幕劇『パレード』(仏: Parade)初演時の様子を綴った作家、イリヤ・エレンブルクの記述です。パレードは当時の観客の度肝を抜き、大きなスキャンダルとなりました。100年前に聴衆の注目と感情を煽り立てた作品とはどのようなものだったのでしょうか。

『パレード』とは

シュールな異文化コミュニケーションバレエ作品『パレード』。1909年から1929年の間にだけ存在したロシアのバレエ団、バレエ・リュスの新時代を告げる重要な作品です。上演時間は13分

とバレエ作品としては短いものですが、その短い時間で観客に与えるインパクトは強烈です。

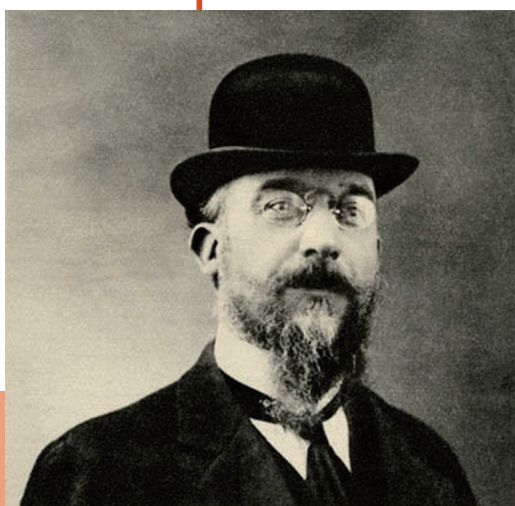
この作品のテーマは「見世物小屋の呼び込み」。日曜日のテント劇場前で客寄せのために様々な出演者が芸を披露しています。劇場のマネージャーがハリボテをかぶって客の興味を引き、アメリカの少女は可愛いセーラー服を着て踊り、中国の奇術師は手品を披露、空中ブランコ乗りの男女二人はアクロバットしたり、馬が走ったりひざまづいたり・・・言葉にするだけでもシュールな予感がしますね。ストーリー性もなくただ淡々とパフォーマンスが行われます。

この作品はバレエ・リュスのディアギレフ、作曲家のエリック・サティ、美術、衣装を手がけたパブロ・ピカソが中心となって制作されました。各分野で時代の最先端を走っていた彼らがどんな人物だったのか、少しだけ見てみましょう。

バレエ：セルゲイ・ディアギレフ

バレエ・リュスから切っても切り離せない人物といえばディアギレフです。彼はロシアの貴族の子として生まれました。22歳のときに親の遺産を相続した彼は、優れた美術家や音楽家たちに彼のための絵画や作曲を依頼しました。そうすることで進歩的なあらゆる芸術を後援し、それらを融合する総合芸術を創り上げました。その一つがパレードだったのです。

今回の研究発表会では様々な作品を監督したディアギレフにとってパレードがどのような作品であったのか、考察していきたいと思います。



出典：Britannica_Image_Quest_113_914905.jpg

音楽：エリック・サティ

ベルベットのスーツにダービーハット、その独特なファッションで有名なエリック・サティ。もともとパレードの音楽はストラヴィンスキーに依頼されていましたが、彼の離脱により計画が破綻しサティが担当することになりました。

タイプライターやサイレンの音を組み入れたこの作品は、ミュージック・コンクレートの予告と取ることもできます。彼の音楽は若い作曲家たちに刺激を与え、「フランス六人組」の誕生へと繋がりますが、その反骨精神ゆえに生涯孤独の道を選びました。常に作品で世に影響を与え続けたサティ。パレードは彼にどのような出会いや発見をもたらしたのかについても注目です。

美術・衣装：パブロ・ピカソ

「ゲルニカ」や「アヴィニョンの娘たち」などの有名作品で知られる、世界的芸術家パブロ・ピカソ。誰でも一度はその名前を聞いたことがあるでしょう。そんなピカソが舞台美術や衣装デザインも多数手掛けていたことは皆さんご存知でしょうか。そしてそのきっかけとなった作品が何を隠そう、パレードなのです。当時36歳、最先端の前衛芸術家であったピカソが担当した舞台美術や衣装は登場人物たちを個性豊かに彩っています。バレエにあまり詳しくない人が見ても、よくあるバレエ作品とはひと味もふた味も違うことがわかるでしょう。

発表ではピカソが制作にかかわった経緯や登場人物たちの衣装、そして舞台美術について詳しく追っていきます。

パレードのみどころ

サティが書き上げた愉快で軽妙な音楽は、一度聴いただけで耳に残ることでしょう。その肝となるのは銃声や汽笛、サイレン、タイプライターなどの“日常の音”。これらは楽器による旋律の中でもひととき異質な響きを放ちます。騒音とオーケストラの調和、そして異質なバレエと異質な音楽の調和をお楽しみください。

また、個性豊かな登場人物たちも魅力です。団員たち（中国の奇術師、アメリカの少女、アクロバット2人組）と、マネージャー（アメリカ、フランス、馬?!）。登場人物を連ねただけでも奇妙ですが、彼らには一つひとつ風刺が込められています。例えば中国の奇術師。当時のヨーロッパでは東洋人というだけで好奇の目に晒され、ヨーロッパ人たちは東洋人を同等の人間として扱わなかったのです。これを風刺して、本作では見世物の役割を中国人が担っています。

当時の最先端を行く芸術家たちによる共同作業の結果生まれた『パレード』。バレエ・リュスが舞台作品のあり方やバレエという概念自体を問いかけた重要な作品であるとされています。

今回の研究発表会では音楽、衣装、舞台美術、台本などの様々な観点からパレードについて掘り下げています。上演当時の衝撃、前衛芸術家たちの活躍について一気に知ることができるチャンスです!!

うんちく

「初演の馬役はウマンスキー」

これで明日からあなたもパレード通・・・!?

「Parade 100年前の衝撃を再び」

会場 国立音楽大学 6-110

日時 11月16日(木) 16時30分開演



出典：Britannica_Image_Quest_108_249354.jpg